

長屋王家木簡（2）

平城宮跡発掘調査部

1988年8月出土の「長屋王家木簡」の概要は『年報1990』に掲載したが、その後の整理の進捗状況をまとめておく。木簡が出土した溝SD4750の木屑層の土を全てコンテナに詰めて持ち帰り、整理室で水洗いをしながら木簡等を探すという作業を行ったが、長屋王家木簡に引き続き二条大路木簡にも継続され、ともに完了したのはほぼ5年を経過した1993年7月である。この間、アルバイトの学生や主婦の方々の力に負うところが大きかった。

長屋王家木簡のほうは整理も終え、全体の点数が35,000点余、うち削屑が29,000点余と判明した。これらについてはこれまで『平城宮発掘調査出土木簡概報』として、主要な釈文を刊行してきた。長屋王家木簡はその21、23、25、27、28の各号で、27までが木簡、28が削屑についての概報であり、28を以て長屋王家木簡の概報は完結した。概報掲載の点数は木簡が計1,253点、削屑が1,707点で、これによってほぼ全体の内容を考察することが可能となった。以下、削屑について触れる。

29,000点という数はこれまでで最大であり、二条大路木簡の削屑がこれに匹敵するものの小片が多く、内容の判明する点数は長屋王家木簡の方が多いと思われる。削屑の内容を見ると、特定の種類の木簡の削屑というよりは、長屋王家木簡のヴァリエーションに対応するように削屑が出土しているといえる。すなわち「謹解」「長屋親王御命符」などの文書木簡、「□田司進上米」などの進上状、「石川夫人進米二升」「画師四口米四升受」などの米支給伝票、「呂^{年卅二}大倭国葛木下□」「上日^{日三百十七}并五百五十八」など官人の考課木簡、「末呂 年五 筥入女子」など奴婢の名を記した木簡、材を横にして多数の行にわたって書いた木簡、習書木簡などである。点数の比率は木簡同様に米支給伝票が半数近くを占めるものと見られるが、そのことをもって、木簡群の最終的な保管場所を長屋王家内で米などの食料を担当する部局と考えると、他の文書木簡や考課木簡の説明がつかなくなり、疑問である。むしろ、これらの多様性を重視して、溝周辺に木簡を扱う部局が集中していて、各所から廃棄されたのか、もしくは一つの保管場所を想定するならば、木簡で「務所」ないし「司所」などと呼ばれる長屋王家の家政機関中枢部を考えた方が良いのではなかろうか。

そうした上で、全体の木簡・削屑を検討すれば、ここに新たな木簡論・削屑論を構築することも可能となろう。これまでの木簡は平城宮内各所に散在したもので、特定の官衙で使用した木簡の全貌などは考えようがなかったし、また削屑といえば、平城宮第32次補足調査の式部省推定地から出土した12,000点余があったが、これはほとんど全てが考課木簡の削屑という、やや特殊なものであった。これに対して、今回の木簡・削屑は長屋王家全体で使用されたものの比率をある程度反映している可能性が高いのである。したがって、古代における文書行政の中で、どのような場面で木簡が用いられ、そのうちどの木簡について削屑が出来るか、といった検討が、今後長屋王家という一つの「官衙」を対象にしてなされるべきであろう。たとえば、米支給伝票の多さというの、一件毎の記録として用いて紐で綴じておき、後に全体を集計して紙の文書にするといった点で、木簡に最もふさわしい使用方法であったからと言えるかも知れない。また大量の削屑の中には確実に荷札・付札から削り取られたと考えられるものが見られないことも注目される。切り込みの有無といった形態上の違いによるのか、荷札・付札は再利用するということがなく、もっぱら文書・記録の木簡を削って再利用していたと言えそうである。長屋王家木簡については今後の検討課題が多い。

なお、現在長屋王宅の発掘調査報告書『平城京左京三条二坊・二条二坊発掘調査報告』と、長屋王家木簡図録の第一分冊にあたる『平城京木簡一』の刊行に向けて準備中である。（寺崎保広）